バスケットボールにおけるグループ戦術の構造分析：「運動形式」に着目した構造主義的アプローチ

内山　治樹

Structural analysis of group tactics in basketball : Structural approach with attention to the movement form

UCHIYAMA Haruki

はじめに

本論文は、2項から成る「緒言」、3章と3項から成る「本論」、「結語」、「注」、そして「引用・参考文献」から構成されている。以下、その概要を報告する。

1. 緒　言

1.1. 問題の所在及び研究目的

われわれの眼の前で繰り広げられているバスケットボールというスポーツは、実際に知覚可能な身体運動として現出する。しかし、そこで生起するシュートやドリブルといった個別な身体運動は、バスケットボールに固有の基礎技術ではあるが、その一つひとつをして、それこそがバスケットボールであるとは見做されないであろう。その一方で、ミニバスケットボールの子どもたちとＮＢＡの一流競技者たちには明らかにプレイの質的違いがあるにも関わらず、彼らが行っているスポーツはバスケットボールとして看取される。こうしてみると、眼に見える一回性的で個別的なスポーツ現象には、何某かの或る特質を持った事象をして「バスケットボール」であると判断するための根拠となる「バスケットボール」が何処かに存在していると考えられる。

他方、バスケットボール競技ではゲーム中に状況が絶え間なく変化し、プレイヤーはその変化するゲーム状況に応じてプレイすることが求められる。しかし、個々のプレイヤーによる基礎技術や個人戦術の行使だけで、複雑で多様なゲーム状況を打開することは不可能である。このことは、翻って、5人対5人が対峙するバスケットボール競技では、集団での戦術行為の優劣やその習熟度がゲームの勝敗を決定する重要な要因であることを意味している。したがって、ゲームで用いられる集団戦術が効果を発揮するためには、集団全体が同じ戦術的意図を持ってプレイできるよう、ゲームでたびたび生起する状況に最も適した有効な戦術の仕組みや原理を共通了解事項として集団全体に浸透させておくことは不可欠である。そして、そこには眼に見える一回性的で個別的で多様な表層での現象を支え、それに根拠を与えている不可視の深層での何某かの仕組みとその根底に横たわる普遍的な法則が存在していると考えられる。

そこで、本研究では、明示的なスポーツルールの桎梏を受けながら、一回性的で個別で多様なスポーツ現象が繰り返し生成する根拠として、佐藤が唱導する「スポーツ構造」（佐藤，1991）概念を援用し、それを構成する一契機として見做される身体性の属性である「運動形式」に着目することで、バスケットボール競技独自の運動形式は集団戦術においてこそ具象化されるという前提のもと、「2人ないし3人のプレイヤーに共通した行為」（Neumann，1990）の理論たるグループ戦術の深層での構造とそこに伏在する普遍的法則の究明を目的とした。

1.2. 先行研究の検討及び研究方法

これまでのバスケットボール競技のグループ戦術に関する研究を概観すると、次の2点に集約することが可能である。まず第1に、2人や3人によるプレイを構成する諸要素が、謂わば「体験知」のレベルで総花的に採り上げられていることであ

る。第2に、2人や3人というグループによって生起する複雑な現象が断片的・部分的に抽出されることによって、謂わば機械論的な要素主義的・還元主義的方法から分析が行われていることである。

しかしながら、バスケットボール競技において生起する現象すべてがこれらの方法で説明できるはずはなく、2人あるいは3人の諸要素間の関係によって生起するグループ戦術が、バスケットボール競技を成立させ、体系づけ、意味づける、その深層の構造（スポーツ構造）とそこに伏在する普遍的法則を究明するためには、新たに何等かの分析装置を設定する必要があるであろう。

そこで、本研究では、グループ戦術という2人ないし3人のプレイを構成する諸要素とそれら諸要素間の関係を考察しようとするならば、「取り出された領域（グループ戦術）の根底に潜む要素の配列を発見しようとする試み」（Gaudner, 1981, 括弧内は引用者）である「構造主義的アプローチ」（構造主義方法論）を用いることは正鵠を射ていると考えた。そして、本研究での目的を達成するために、(1) これまでの「構造」に関する定義から改めて「スポーツ構造」概念を検討し、(2) その概念化から「運動形式」の特性を抽出することによって、表層で生起する個々の「形態」から深層での「構造」へとグループ戦術の定式化（モデル化）を図り、(3) そこに伏在する法則を明らかにする、という3つの段階から成る手順を採ることとした。

2. 本　論

本論は、「スポーツ構造の基底詞としての『構造』の概念化」「身体性の属性としての運動形式の特性」「バスケットボールにおけるグループ戦術の構造と法則」という3つの章から構成され、また、最終章は、「2対2」「3対3」「グループ戦術構造の普遍的法則」から成る3つの項によって、各々論述が展開された。以下、順に内容を概述する。

まず、「スポーツ構造の基底詞としての『構造』の概念化」の章では、「スポーツ構造」の基底詞たる「構造」について範とした構造主義、特にレヴィ＝ストロースの「『構造』とは、要素と要素間の関係からなる全体であって、この関係は、一連の変形過程を通じて不変の特性を保持する」（レヴィ＝ストロース，1979）という定義、及び言語や社会現象の「無意識的な下部構造」に目を向け、そこでの要素ではなく、要素間の「関係」を捉え、それを「体系」として把握し、それらの諸体系の根底に変わらぬ「構造」を見抜いて、これを「一般的法則」の形で認識する、という彼の研究手法（レヴィ＝ストロース，1984）を検討し、本研究での「スポーツ構造」への援用の妥当性について考察を行った。

結果として、スポーツ構造は、スポーツ現象において生起する諸要素から成る体系としての表層での構造とは峻別され、身体性、知性、感性という3つの契機それぞれが深層で有機的に関連し合う「複合的構成体」として、「全体性」「変換性」「自己制御性」という3つの本質属性によって規定されることが確認できた。

次に、「身体性の属性としての運動形式の特性」の章では、「運動形式」はあくまでも身体的能力が対象化されてスポーツ構造の一契機を構成している場合の「形態」であり、それは客観化された身体技法のことに他ならず、バスケットボールならバスケットボールと分かる形を持って体系化していると捉えた。この前提から、「運動形態を構成せしめるよう法則的に機能する形式」（佐藤，1998）とする「運動形式」の概念内容の指摘や、「運動形式」は意味されるもの（シニフィエ）の要素であって、「体系」の中に組み入れなければ意味作用を持ち得ず、特に、その意味作用の体系は、記号は他の記号との違いによってのみ定義されるという「示差性」や幾つかの「対立の組」を含んで成り立っているとする見解（レヴィ＝ストロース，1984）を踏まえることで、「運動形式」は、一つの要素それ自体ではなく、むしろそれらの関係に体系の眼目があることを明らかにした。

このことから、バスケットボール独自のグループ戦術は、意味されるもの（シニフィエ）としてのチーム戦術の要素であって、さらには集団戦術という一つの「体系」のもとに成り立っていることを確認した。そして、集団戦術は「全体性」のもとに「対立の組」、すなわち、攻撃者と防御者との対峙関係や、集団内にボール保持者とボール非保持者が並存するという関係的状況下において「自己制御性」を機能させつつ成り立っているという点で、新たに「示差性」という特性の影響を蒙ることが明らかになった。

第3章では、上記の2つの章における考察結果を踏まえ、本研究の主題である「バスケットボールにおけるグループ戦術の構造と法則」の具体的な検討を、以下の3つの観点から行った。

まず、「戦術の最小単位」(Stiehler et al., 1988)と見做される「2対2」の項では、これまでの数多くの先行研究を概観することで、オフェンス側から見た2対2の典型的な運動形式は、ボール保持者とボール非保持者の2者関係から成る「カット・プレイ」と「スクリーン・プレイ」であることが明らかにされ、その運動形式の内実を図1に示されるような「原型モデル」として提示した。また、これら5つの原型は、それだけでも攻撃側の最終目標である「ゴール下での1対0の状況からシュートを決める」ことは十分可能であるが、しかし、それらの運動形式がスポーツ構造の特性を有している限り、「全体性」「変換性」「自己制御性」に加え、限られた時間軸を有する関係的表現の「場」であるコートと、そこに定立する残り3組の相対峙するプレイヤーたちとの「示差性」が関与することで、つまり防御側が採る「ヘルプ」や「スイッチ」などのグループ戦術行為により、何れの場合にも「変形」(オプション・プレイ)が存立すると捉えた。そして、この「原型」→「変形(オプション・プレイ)」という弁証法的発展関係は、「戦術解決プログラム」(Deltow et al., 1978)での検証や、或るグループ戦術行為から次なるグループ戦術行為へという「刺激に対して連鎖反応する」(吉井, 1987)という指摘を踏まえることで、2対2の状況下でのグループ戦術が有する固有の仕組み(構造)には、「自己制御性」に加え、新たに「択一性」と「連続性」という特性の存在が明らかであることが判明した。

次に、「3対3」の項においては、それを2対2が発展した運動形式として位置づけながらも、「ボール非保持者は、同じボール非保持者である味方のプレイヤーにスクリーンをかけることができ、それによってボール非保持者はボール保持者からのパスを受けることができる」(Hagedorn, 1985)ことや、「択一性」と「連続性」によって「三角形という標準的状況」(Hagedorn, 1985)を常に保持するという「自己制御性」に則った3人目のプレイヤーの参加が可能になることから、「第3の動き」(松本と鈴木, 2001)と称される新たなプレイの規定性を3対3に固有のものとして

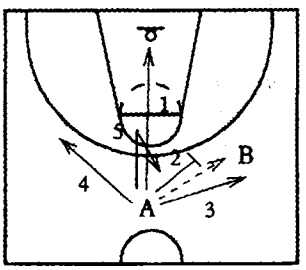

図1. 2対2の原型モデル

位置づけた。また、攻撃者と防御者との「示差性」によって、防御側では「ローテーション」が生じることも指摘した。

最後に、「グループ戦術構造の普遍的法則」の項では、上記の2つの項での検討に加え、「択一性」は「連続性」と連動してはじめて効力を発揮する、という前提のもと、グループ戦術構造に伏在する攻撃側の共通了解事項とは、「場」と「個人の能力差」を内包する「優先順位」と、移動(モーション)によって攻撃のために有利なスペースを創り出したり、そのスペースを自分が活用したり味方に活用させる「スペースの創造と活用」、という2点に纏められることを明らかにした。そして、それらが実際に効力を発揮するためには、「2秒以上その場に止まらない」「プレイヤー同士は常に4～6m離れて位置する」「3回のパスの間に1回はインサイドを攻撃する」「サイドチェンジ(左右、内外)を行う」が、グループ戦術を現実的に機能させるための「協働(コンビネーション)のための法則」として捉えられ、これらこそが普遍的法則に他ならないとした。他方、防御側の普遍的法則とは、「優先順位」と「スペースの創造と活用」からもたらされる、「協働のための法則」の効力を攻撃側に発揮させないことであることも指摘した。

3. 結　語

以上のことから、バスケットボール競技におけるグループ戦術は、「全体性」「変換性」「自己制御性」が相互に規定し合いながら、「示差」的要素の介在を通して「択一」的に「連続性」を維持し、自らを弁証法的に再形成していくような「スポーツ構造」を深層に内在させた複合的構成体として実在するための理論であり、それこそが、バスケットボール競技における集団戦術の中核とし

て位置づけられる、と結論づけた。

おわりに—研究の意義と成果

本研究の意義は、バスケットボール競技におけるこれまでの戦術研究に対して、敷衍すれば、一回性的で個別的であるが故に多様さを益々増幅させているこれまでの所謂「ゲーム分析」に比して、新たに次の3つの視点を提示し、検討を加えたところにある。

すなわち、第1点は、一回性的で個別で多様な「スポーツ現象」を扱うのではなく「スポーツ構造」の分析こそが戦術研究には相応しい、というものであり、第2点は、バスケットボール競技の集団戦術において中核となるのはグループ戦術である、というものである。そして、第3点は、このような立場を整合的に理解するための分析装置として構造主義方法論を援用したことである。

従来の戦術研究とは全く趣を異にする、これらの視点によってもたらされた考え方及び知見は、バスケットボール競技における戦術研究の理論知と実践知との構造連関に光を当てることとなり、この領域において新たなパラダイムが構築されるに至ったと言える。

また、本研究で得られた具体的な成果は、攻撃時の「優先順位」と「スペースの創造と活用」という共通了解事項の究明によって、特に前者における「場」及び「個人の能力差」という2つの要素の抉出を通して、従来より複雑であるが故に曖昧模糊としてきた攻撃時の目標には、(1) ゴール下、(2) ハイポスト、(3) ウィング、(4) 3点シュートラインの外側、という優先順位があること、逆に、「示差性」という特性によって、防御時には攻撃時の優先順位を逆順に抑えていけば良いこと、という2点が解明されたことである。そして、これらの知見は、トップレベルばかりか初心者の指導において、今後必ずや有益な且つ多大な貢献をもたらすにちがいない、ということである。

なお、図の一部、注、引用・参考文献については、紙幅の都合上割愛した。